

09 【街の散策からの気づき発見】

大池鎮守の神々

会員 K.T.

街の散策を楽しんでいることから、仲間の N さんから大池親水公園の北側に小さな神社があるので、いってみましょう、ということになった。大池親水公園を通り抜けると、参道碑があり、住宅地に囲まれた小さな敷地に鳥居、3つの祠と2つの碑が祀られている。「大池鎮守の神々」という説明板があった。

郷土資料によると、大池は古利根川が現在の河道になる以前(近世以前)に成立していたと考えられている。大池を描いた最古の資料としては、安永3年(1774)の絵図がある、という。

伝承によると、天明6年(1786)の洪水の時、岸の柳に大蛇がいた、という逸話が残されている。大蛇は水神の化身だろう。

説明書きに基づき、「大池鎮守の神々」をみる。狭い敷地の中に5神が祀られている。祭神の神話をネットで調べてみた。

水神社：祭神は、弥都波能売神(みずはのめにかみ)

古事記では、弥都波能売神、日本書記では、罔象女神と表記される。日本の代表的な水の神。

稻荷社：祭神は、宇迦之御魂大神(うかうのみたまのかみ)

古事記では、宇迦之御魂大神、日本書記では、倉稻魂尊(うがのみたまのみこと)と表記される。安永3年(1774)の絵図に記載はあるが、廃れ、廃社となり、現在のものは、昭和54年(1979)に京都伏見神社に出向き、新たに御霊を申し受け、この地に勧請する、とある。名前の「ウカ」は穀物・穀物の神で京都・伏見稻荷大社の主祭神。

西側稻荷社：祭神は、茶吉尼天(だきにてん)

日本の茶吉尼天は稲荷信仰と習合し、白狐に乗る天女の姿で表される。祠の掛け軸には白狐に乗る茶吉尼天がいた。茶吉尼天の起源は、インドのダーキーニー、裸身で虚空を駆け、人肉を食べる魔女とされていた。

浅間神社：祭神は、木花咲耶姫神(このはなさくやひめのかみ)

古事記では、神阿多都比売(かむあたとひめ)別名木花之佐久夜毘売(このはなさくやびめ)、日本書記では、神吾田津姫(かみあたとひめ)、別名を木花開耶姫(このはなのさくやびめ)と表記される。神話では天照大御神の命を受けて地上世界に降臨した邇邇芸命(ニニギノミコト)から求婚を受ける。木花咲耶姫神は一夜で身ごもり、疑いを晴らすため、産屋に入り、「天津神である邇邇芸命の本当の子なら何があっても無事に生めるはず」と、産屋に火を放ち、その中で火照命・火須勢理命・火遠理命の3柱の子を産んだ。火遠理命の孫が初代天皇の神武天皇とされている。神々の時代から天皇の時代へ移行する時代の神である。

雷神宮：祭神は、賀茂別雷神(かもわけいかづちのかみ)

この神は記紀神話には登場しない地方神のひとつ。上賀茂神社の祭神で、各地の賀茂神社に祀られている。「雷を別けるほどに強い力を持つ神」という意味があり、厄除け・災難除け・必勝の神として信仰されている。

「大池鎮守の神々」は多様だ。それにしても、狭い敷地に押し込められている感じで、神様達には気の毒に思う。すぐ近くに大池親水公園があるが、地を守る神様達の転居は、なかなか大変なのだろう、と思う。

